



contents

2007年度助成金贈呈式を実施	1
公開シンポジウムを開催しました	2
《人と人のつながりがアジアの可能性をひらく》	
《徐福伝説を『縁』とした地域と人とのネットワークの構築》	
《東アジアにおけるまちづくりの現代史を共有するアーカイブ・ネットワークの構築》	
《グローバルコミュニティにおける国際NGOと現地NGOとの役割と関係》	
プログラム・オフィサーより	6
《アルゼンチン日本人移民プロジェクトに寄せて》	
《一次情報と資金:ファンドレイジングに関する比較論》	
新刊紹介	7
短信	8

[財団法人トヨタ財団]

〒163-0437

東京都新宿区西新宿2-1-1

新宿三井ビル37階

TEL(03)3344-1701

FAX(03)3342-6911

<http://www.toyotafound.or.jp/>

2007年度助成金贈呈式を実施 106件の助成が決定しました。

2007年10月25日に今年度のアジア隣人ネットワークプログラムおよび研究助成プログラムの助成決定者に対して、贈呈書を進呈する贈呈式を実施しました。今年度はアジア隣人ネットワーク39件の合計1億2000万円、研究助成(本体)33件、特定課題「アジア周縁部における伝統文書の保存、集成、解題」10件、特定課題「助成金が活きたら」3件、特定課題「江南・嶺・湖南・瀬戸内」4件、合計2億500万円の助成が決定しました。

それぞれのプログラムの選考経過が各選考委員長などから説明されました。この席で、アジア隣人ネットワークプログラムの濱下武

志選考委員長からは、構想・運営・表現におけるネットワーク性を同時に意識して課題を追求してほしいという助言と激励がありました。また、研究助成「くらしのいのちの豊かさをもとめて」の田中耕司選考委員長は、従来よりも応募内容と成果の提示方法が多様化してきた傾向にふれ、「本当に世の中の役に立つ研究をしていただきたいと願っている」と述べました。特定課題を含めてこれらを概観すると、共通した今後の課題は、研究成果を社会化するためにはどのようにすればよいかということであるように見受けられます。

また、遠山敦子理事長からは今年度の助成対象者に向けて「助成金を有効に活用して、豊かな社会づくりに向けて、価値ある成果となることを期待しております」との挨拶がありました。

そして、助成決定者を代表して、研究助成特定課題「アジア周縁部における伝統文書」で「民家の物置からインド洋を眺める」というテーマで助成が決定した東京外国語大学の**新井和広さん**、アジア隣人ネットワークプログラムで「民族紛争の続くスリランカにおいて、在来人のシンハラ人と渡来人のタミル人により『バッテリーチャージ建設』を協働することによる、コミュニケーションの向上とネットワークの構築」というテーマで助成が決定した道具の会の**川島康治さん**が遠山理事長より贈呈書を受領しました。

なお、この贈呈式に引き続き、助成を受けた方々の相互交流を目的として交流会が行われました。約150人の参加があり、プロジェクトについての意見を聞いたり、プログラム・オフィサーを介した新たな出会いがあったり、さまざまな出会いの場となることができたようでした。



遠山敦子理事長から研究助成の新井和広さんに助成金贈呈書が手渡されました。

公開シンポジウムを開催しました

人と人とのつながりがアジアの可能性をひらく ネットワーク形成が生まれるもの

2007年10月25日、トヨタ財団は「人と人とのつながりがアジアの可能性をひらく ネットワーク形成が生まれるもの」と題する公開シンポジウムを開催しました。

当日はアジア隣人ネットワークプログラムの助成を受けた3人の方が発表され、成蹊大学法学部の宮村治雄教授がコメンテーターを務

められました。

宮村教授は東アジアの「開国経験」のなかでの社会や文化の開かれ方をふまえてコメントをなさり、共同体相互の紐帯の発見、プロジェクトを結ぶネットワーク、インターオーガニゼーションにおける課題についてそれぞれ指摘されました。

最後に、京都大学大学院アジアアフリカ地域研究研究科の平松幸三教授より、総括のコメントがあり、ネットワーク形成の「成果」のあり方はけっして一様ではないこと、最も大切なのはネットワークづくりのプロセスであることが改めて語られました。以下にこのシンポジウムの発表の要旨をご紹介します。

徐福伝説を『縁』とした地域と人とのネットワークの構築 口承文芸における新たな比較研究の可能性に向けて

達志保 愛知県立大学文学部非常勤講師

研究としての徐福伝説

徐福については、司馬遷の『史記』に記録がある。秦の始皇帝が国家統一後、「不死の薬」を求めよと徐福に命じた。童男童女数千人とともに東海の三神山へ徐福は赴き、平原広沢を得て王となり帰らず、とある。徐福が辿り着いた場所として、日本、韓国に伝説が多く残っている。中国では徐福の生誕地や出航地が注目され始めた。私は民俗学を専門とする立場から、口承文芸(伝説)研究という面で徐福に興味を感じている。

徐福伝説の興味深い点は、海をはさんで



つながっているところにある。徐福伝承地は日本、韓国、中国に数十ヵ所ある。民俗学では、伝説がいろいろな場所に存在することが判明してしまえば、もはや伝説は消滅すると考えられてきた。ところが徐福伝説を伝える地域の間では、信憑性争いによって袂を分かたつのではなく、互いに話を合わせてともに成り立たせようとするのである。

日本国内の伝承地を訪ねてみよう。まず、三重県熊野市波田須には徐福の墓がある。熊野古道が世界遺産に登録されてから、この道に徐福茶屋がつけられた。約30キロ南の和歌山県新宮市にもまた徐福の墓がある。紀州藩祖徳川頼宣の命により建立されたものだ。竹下政権時にはふるさと創生資金で徐福公園も築かれた。今年97歳になる伝説の語り部も健在である。

京都府伊根町では80歳の男性が、自分がいなくなったら丹後半島の伝承はなくなってしまおうという危機感から、今年自費で新井崎神社に口碑記の石碑を建て、多くの人が集まった。このように、徐福は行政ではなく地域の人々の尽力によって各地で伝承され続

けている。また、学校でも総合学習などを通じて受け継がれ、青森県中泊町の中学校、福岡県八女市の小学校などで徐福渡来関連の行事がある。

ネットワーク構築の動機と過程

私には高齢の伝承者のことを次の世代に伝えたいという思いがあった。各地の動きをまとめる試みも今までにあったが、それぞれに自分たちの伝承を大切にしているので、上部組織という形態では成り立ちにくい。それならと私自身が連絡係を買って出ることになった。また、各地で出されている書物を研究の場に持ち込むことができないかと考えた。

一方では、民俗学研究者という立場にある自分が地域を動かしてよいのか、という思いも持ち続けてきた。だが、連絡係を務めることを通じて、地域の人が求めているところに自分を置くことが必要ではないかと思うようになった。そのことによって研究姿勢が変わるわけではない。すでに地域に足を踏み入れている以上、地域の人々の思いに寄り添おうと考えた。そのうちに、中国や韓国の言葉が

できない私が助けを求めることで、新しい仲間が現れた。また、年配の人たちとネットワークをしていくには手紙や電話が欠かせない。

中国では、江蘇省連雲港市の徐福節が毎年10月に挙行される。山東省龍口市では5月に、同じく山東省膠南市では6月に行われる。河北省秦皇島市、浙江省岱山島でも徐福出航にちなむ祭りがある。

韓国の場合、国の予算で国際セミナーなどが開かれている。日中間で徐福関連の交流が国交正常化から始まったのと同様に、中韓の友好交流として徐福が扱われている事実がある。中国の山東省から済州島に向けて徐福像が贈られ、除幕式が行われた。

また、韓国の慶尚南道には、福岡県の八女に徐福が出かけたと書かれた石碑があり、八女からそれを見に行こうという人の動きが始まっている。

さらに新たな展開もある。2004年に佐賀県で大きな徐福上陸記念碑が台湾の徐氏宗親会によって建てられた。中国では日本のビジネスマンが浙江省の慈溪市に徐福記念館を建て、交流だけでなく日本語教育を行い、地域の若者たちのスキルアップに活用させる

中国・江蘇省蘇州府に建つ徐福像



場所づくりも始まった。台湾でのケースのように、華僑あるいは渡来人の先達として徐福を捉えていこうという動きもある。

ネットワーク構築の成果と展望

イベントが行われている各地に自分が実際に足を運ぶことで、地域からの視点が見えてきた。今年たまたま私が体調を崩したことをきっかけに、地域の人たちの自主的な工夫が表に出てきたのはうれしい誤算だった。双方向のネットワークがいま確実に始まっているという実感がある。

もうひとつ、私自身にとっては、徐福伝説を研究の場へ持ち出そうという願いが、中国の民俗学界においても理解されるようになってきたという喜びもあった。

今後も、徐福伝説伝承のおもしろさを研究者仲間と語っていきたい。私の役割は、徐福伝説を知らない人たちに向けて徐福伝説の魅力伝える部分にあると感じている。生活のなかに伝説があり、それはつねに動いており、政治的にも使われるということを理解しながら、グローバル化のなかの口承文芸、伝説を捉えていこうと思う。

東アジアにおけるまちづくりの現代史を共有する アーカイブ・ネットワークの構築

饗庭伸 首都大学東京 都市環境学部准教授

まちづくりとは？

都市計画をもっと市民のものにしようという動きは1960年代から始まった。かたいイメージの都市計画に対して、市民と行政と専門家が一緒にやっていく「まちづくり」が実践され、ここ40年ほどの間にさまざまな技術、手法が生まれてきた。たとえば、市民が模型を使って公園の設計に参加するといった活動が日本各地の自治体を中心に展開されている。

私が研究者となった90年代末、韓国や台湾でも同じようなものがあるということは気づかれていた。近隣国のまちづくりを誰かが見に行くことを通じて次第に交流が生まれたというのが最近の状況である。そこで、より深くお互いを理解するために、共通の知識の基盤を共同でつくることを考え、それがわれ

われのプロジェクトのスタートラインとなった。

プロジェクトは要約すれば「韓国・台湾・日本の『まちづくりの現代史』について、先駆者への共同インタビューなどを通じて共通の歴史を描く」ということである。お互いのまちづくりに限定した現代史を理解しようということからスタートし、それぞれの場所で早い時期に活躍していた人に話を聞きながら共通の歴史を描くことを考えた。ポイントは、われわれも他国の先駆者にインタビューをし、韓国、台湾の人も日本の先駆者の話を聞くというように、掘り起こしのプロセスを共有することである。

プロジェクトの最終的なイメージは、国際的には若手研究者がネットワークをつくり、国内的にはインタビューを通して、まちづくりを

引っ張っていた年長世代との関係をつくっていくというものである。そして、関係をただつくるだけでなく、成果をアーカイブにして、それをわれわれのネットワークの中心に置くということ考えた。





第1回国際ワークショップで参加者とともにまちを歩く

課題と運営の流れ

プロジェクト自体は、トヨタ財団の助成以前から始めていた。最初の1年ほどは日本で組織化をしつつ、台湾と韓国に呼びかけをした。2006年夏に日本で共同研究の方法をまとめ、提案をしていった。三者の言語の違いからコミュニケーションの難しさが予想された。そのためあまり複雑な研究ではなく、なるべく全員が共有できるようなシンプルな研究方法を提案した。

2007年6月、7月に打ち合わせを韓国、台湾でそれぞれ行い、8月に3者が初めて会う国際ワークショップを開催した。先駆者インタビューを合同で行ったときは、逐次通訳をしながらそれぞれが質問した。さらには日本のまちづくりの現場を見てもらおうということで、まち歩きも実施した。

問題点とその解決

最大の懸案事項は、ネットワークをつくる際

に誰を起点とするかであった。不用意に声をかけると、特定の大学だけのつながりになってしまう可能性がある。各社会の組織文化への配慮も必要だった。韓国では年長者が尊敬されており、年長者が参加するとみんなが集まる社会だという。また台湾は小さい島のようなものが集まり、島の中は濃密だがそれぞれ孤立している社会だと聞いた。結果的に呼びかけのしかたも異なるものになった。

言葉は当初、英語の使用を考えていた。しかし、各国のまちづくりの現場では英語が通じない。まちづくりは現場の学問であるから、現場の話をきちんと伝え合うことが重要だ。そのため、3か国語間の通訳を入れて、コミュニケーションの環境を整えることに心を砕いた。

コミュニケーション手段としてインターネットを利用する計画があったが、結果的には活用に至らず、むしろ直接会うことを重視した。目的はネットワークをつくることにある

ので、複数で会うことを心がけ、人と人の結節点になるべく多くなるように意図した。

成果と影響、今後の展望

ネットワークの成果はアーカイブとして残す考えである。日本の情報を充実させる一方、各国で同じフォーマットを用いて情報を整備してもらっている。たとえば、人のリスト、事例のリストの作成、年表への書き込みを進めている。

東アジアの現代史は、これまで“大きい言葉”で語られてきた。しかし、市民社会の小さな領域の小さな歴史については、まだお互いが描かれていない。私がしていることは、ある市民社会の中のまちづくりという小さな分野の歴史を細かく描くことだが、もし同じような方法で地域福祉、教育、環境運動などの歴史も描いていけるならば、そこから興味深い現代史の束ができてくるのではないかと考えている。

助成期間中(2007・11・01～2009・10・31)にあと3回ほどのワークショップを企画している。先駆者のインタビューを数多くとり、それを市民向けに読みやすくまとめたい。

日本にいる留学生との勉強会もスタートさせた。また、各国の市民団体から、日本に行きたいという連絡がよく入るようになってきた。今のところ研究者レベルの交流が中心だが、現場の専門家レベルの交流をこれから組織していきたい。

これからの方向は目下、議論の最中である。これまで集中して組織づくりをしたので、今後は緩やかなネットワークでよいと思う人もいる。他方、もう少し継続的な、ネットワークというよりはプラットフォームのようなものをつくるとよいという意見もある。あと1年をかけて見極めていきたいと思う。

グローバルコミュニティにおける国際NGOと現地NGOとの役割と関係 南アジアを事例として

筒井哲朗 シャプラニール=市民による海外協力の会 事務局次長

これまでの活動と問題意識

シャプラニール=市民による海外協力の会は1972年に設立され、活動地域はバングラ

デシュ、ネパール、インドの3か国である。99年までは、日本人が駐在し現地スタッフを雇用するかたちで、すべてのプロジェクトを直

接実施してきた。

70～80年代は、バングラデシュ独立後の混沌とした状況下、農村の貧困に対する支



援が活動の中心だったが、その後、少しずつ貧困問題が改善に向かう一方で新たな問題が表れてきた。なかでも都市化問題をはじめとした事情の顕在化によって、海外のNGOとしての役割は何なのかということに思い至ることになった。時を同じくして活動範囲が複数の国に拡大し、それまでの経験をどのように活かすことができるかを考えている。

ネパールでの活動は96年に始まった。海外のNGOが直接支援するのではなく現地NGOと協働で事業をするというネパール政府との約束があり、現地NGOとパートナーシップを組む態勢で活動を始めた。

96年にネパール、99年からはバングラデシュで、都市での問題に取り組み始めた。これまで行ってきた農村の活動は現地スタッフに暖簾分けし、今は3つのNGOとして独立している。こうして10年がかりで間接的アプローチに移行し、現在ではすべて現地NGOとパートナーシップを組んで活動するようになったが、そのなかでまた違った難しさに直面している。そこで、欧米のNGOの考えや、現地NGOの海外NGOに対する見方を知るために、NGOのリーダーらと会合を開いてきた。

ネットワーキング形成の目的

第一に意識することは、パートナーシップと資金供与との違いである。われわれは、共同でプロジェクトを立案し、計画し、実行しながら評価していくというスタイルを重視しており、単なる資金供与とは違うと思っているが、受け取っているパートナーの感覚はどうも違うようだ。そこで、パートナーシップのあり方、先進国側の貢献のしかた、対等な関係の築き方をさぐるのがネットワーキングの目的の1つであった。

第二に、現地に足場をもつ国際NGOがどのような役割を果たしていけるのか、というこ

とがある。これまでのように一緒に泥まみれになる活動が先進国側NGOの役割なのか、それとも現地で動き始めている運動や活動を支えていくことがわれわれの役割なのかといったことを知りたかった。

パートナーシップとは名ばかりで実際にはドナーである先進国側NGOが、自分たちのしたいことをそのまま現地NGOに代行させるといふ、「ドナードライブ」のかかった関係をよく目にする。しかし一方で、金だけ出すという関係もまた正しくないであろう。この間のどこに自分たちのポジションを置くべきであろうか。

ネットワーキングの実施概要と成果

トヨタ財団の助成プロジェクトでは、インド、バングラデシュ、ネパールで5回のディスカッションフォーラムを開催し、その後も現地NGOと情報を共有しながら活動している。また、これまでの経緯をまとめ、『進化する国際協力NPO』明石書店を刊行した。

活動の成果としてはまず、海外のNGOと現地NGOとの関係には理想とする固定の関係はなく、「相互関係の変化するプロセス」であるということがわかった。

海外の人々には「何がしたいのか」とよく聞かれた。自分たちが望ましいと思う関係づくりを目標せよよく、まず「シャプラニールがやりたいことは何か」というところから始めたらどうか、というのである。このようなことから、当事者の現地NGOと外部者である海外NGOの2つのアクターが刺激を与え合うような関係がパートナーシップのありようではないかという考えに至った。

そうしたなか、2005年にインド洋大津波とパキスタン大地震が起き、インド、スリランカ、

パキスタンで緊急救援活動を行った。われわれの事務所がない被災地において、まずはネットワークで知り得た人たちに連絡をとり、信頼のおけるNGOはどこか、空白地帯での活動や災害弱者に特化した活動をしているのはどこかといった情報を複数得るよう努めた。その結果、比較的敏速に自分たちのできる範囲での活動ができたと思う。また、日本から津波の専門家を派遣するのではなく、水害対策の経験豊かなバングラデシュの専門家を津波の被災地域に送り、現地のNGOに対しアドバイスをしてもらった。

プロジェクト終了後の動き

今まではプロジェクトを成果の見えるように行うという視点からパートナーを選定してきたが、グループあるいはNGOを育てるという役割をわれわれが担ってもよいと考えた。しかし、団体を育成することはプロジェクトより数倍大変で、新たな問題にぶつかっている。

現在直面している問題として、農村での活動をシャプラニールから独立して担っている団体とのつきあい方がある。団体育成と事業遂行の2つを同時に追い求めているが、これがなかなか難しい。相手組織のガバナンスに対してどこまで関わるべきなのかという問題も重要である。

われわれはバングラデシュのローカルNGOとして一人前になりたいという気持ちで、ずっと活動をしてきた。気がつくと、ほかのローカルNGOはもっと大きくなって立派な活動をしている。日本から来ている国際NGOとして南アジアでどういう活動をしていけばよいのかということを考えつつ、日々の努力をしているところである。



トヨタ財団助成プロジェクトとして名古屋市で行われた国際NGOシンポジウム

プログラム・オフィサーより

アルゼンチン日本人移民プロジェクトに寄せて

楠田健太 アシスタント・プログラム・オフィサー

2007年1月、年来の熱烈なボケンセである私にとって「約束の地」、南米大陸はアルゼンチンのブエノスアイレスに降り立ちました。

2005年度にトヨタ財団ではFANA (Federación de Asociaciones Nikkei en la Argentina / 社団法人在亜日系団体連合会) による、「アルゼンチン日本人移民史第二巻戦後編」の刊行プロジェクトの一部を助成させていただきました。今後第一級の史料となるであろう浩瀚な移民史がようやく出版の運びとなった後、アルゼンチン日本人移民資料館の



アルゼンチンが誇る3人の英雄。左からガルデルム、エピータ、そしてマラドーナ。(カミニート地区にて)

設立にあたって、非公式に打診をいただいていた継続助成の可能性を探ること、そして極力多くの人に会って日系移民の方々の実情を知ること 格好良くいえば、今回の出張の目的はそんなところですよ。

約10日間の日程のほとんどに同行していただき、ひとかたならぬお世話になった久田アレハンドロ氏は言います。「アルゼンチンは、いわゆる先住民の割合が3%程度と他の南米諸国と比べて極めて低く、イタリア系やスペイン系をはじめとする多様な各国移民で構成された国で『民族のつぼ』と呼ばれている。歴史的にはつい最近まで、そのうち『つぼ』のほうが強調整されていた。つまり、どのような出自の持主であれ、とにかくそれをかき混ぜて、アルゼンチン人という国民性を作りましょう、という観だった。それがグローバル化の進んだ1990年代以降、特に2001年末のデフォルトを経て、『民族』の部分により強調されるようになり、各民族の伝統や文化、習慣を見直そうという機運が高まっているよ。」

昨今のアルゼンチンでのこのような風潮が、手放しで喜んでよいものなのか、私には正直よく分かりません。トヨタ財団「アジア隣人ネット

ワークプログラム」の助成対象者でもあるテッサ・モーリス=スズキ先生の『それぞれ固有の文化』などというものは存在し得ない。『文化』というのは、その発生の時点で、『multi』であり『inter』なものである」というしなやかな発想にも魅力を感じるからです。

さて出張から帰国後、約半年にわたる厳正な審査を経て、アルゼンチン日本人移民資料館の展示活動は、継続助成として無事採択されることになりました。学生時代のかけがえない師匠の一人である内田樹先生(神戸女学院大学教授/多田塾甲南合気会師範)によると、今の自分にとって何だかよく分からないものに対し、安易に性急な答えを出そうとするのではなく、分からないものを分からないままペンディングしておけるのも立派な能力の一つとのこと。このたびは師匠の素敵な知的態度にあやかって、このプロジェクトが今後アルゼンチンの社会にどのような化学反応を起こすのか、微力ながら未永く見守っていきたいと思っています。

ボケンセ=ブエノスアイレスを本拠地とするサッカークラブ、ボカ・ジュニアーズのサポーターのこと

一次情報と資金: ファンドレイジングに関する比較論

本多史朗 チーフ・プログラム・オフィサー

財団で研究助成プログラムを運営していると気がつくことがある。それは、外国人と日本人の間に見られる財団へのアプローチの違いである。外国人研究者(特に欧米人+

在外華人研究者が顕著)は、しばしば財団を訪れ、財団がどのような趣旨で研究助成を実施しているのか、採択されるプロジェクトはどのような傾向なのか、についての一次情報を

取材する。話は時によっては1時間から2時間に及ぶこともある。日本人研究者でこれをする人はあまりいない。



無論、募集要項などの形で、財団はウェブサイトにも助成プログラムに関する基本的な情報はすべて掲載しており、直接訪問はしなくても、応募する研究者は困らない。ただ、外国人研究者が欲しいのは、もっとニュアンスに富んだ話のようだ。プログラムの担当者の顔を見ながら、さまざまな質問をぶつけ、それへの対応を見ているのだろう。そこにはインフォーマルな一次情報というものに対する執念を感じる。

海外に出張に出たときにも感じるのは、欧

米系の財団やファンディングエージェンシーのスタッフがモニタリングを行う際に、助成対象者から情報を引き出す際の徹底ぶりである。日本人スタッフは、あまり立ち入ったことを助成対象者に聞いてはいけないのではとか、気を悪くしないかなどと気を廻してしまい、当たり障りのない質問で終始することもあるのだが、どうも彼らの場合はそのような心理的な配慮よりも、情報の体系的な収集の意識が優先されるようだ。しばきあげるなどという言葉も連想する。朝食時にも、遠慮なく情報交換や収集を行っているので、消化

には悪くないのかと思わず考えてしまう。

ただ、経験的に言えるのだが、助成金あるいは資金というものは、濃密で且つ良質な情報がある方向に流れていくという特性を持つ。そうすると、インフォーマルな一次情報の収集に執念を燃やすのはむしろ当たり前はずだ。国際金融機関で、なかなか日本人スタッフが上層部に食い込むことができないというのはこの辺りの淡白さにも理由があるのかもしれない。

新刊紹介 (成果発表助成等を得て出版された刊行物)

ブラムディア・アナンタ・トゥール著、押川典昭訳『ガラスの家』

めこん、2007年8月刊、四六判、
上製(ハードカバー)、731ページ、
3,500円(税抜き)

1965年インドネシアで起きたクーデター未遂事件、いわゆる9.30事件の影響によって徹底した共産党弾圧が行われ、当時左派の論客として活動していたことから著者であるブラムディアは政治犯として逮捕され、辺境の地ブル島に流刑された。本書はそこで書き上げた長編歴史小説『人間の大地』『すべて民族の子』『足跡』に続く四部作の完結編である。

題名の『ガラスの家』は植民地国家オランダ領東インドにおいて、ガラスの家を監視するように、ナショナリズム運動にかかわる者たちを監視する体制の隠喩である。本書は前3作と異なり、これまでの主人公ミンケを弾圧する植民地政府の高級官僚パンゲマナンの日記を通して語られている点が興味深い。文学という手法を用いてインドネシアのダイナミックな現代史を骨太に描いた雄渾の大作である。

この四部作は本書の影響力を恐れるスハルト政権によって発禁処分となったが、40を超える言語に翻訳され、国際社会に大きな影響を及ぼした。

翻訳は大東文化大学の押川典昭氏によるものである。初版本を元に翻訳したが、原著そのものに誤字・脱字等の多くの誤りがあ

ったために、ブル島で執筆された元原稿と全文対照したという。そのため、精緻な翻訳であり、訳注も丁寧に書かれている。

ブラムディアが生きた80年は、インドネシアの激動の歴史そのものである。その彼の生涯とミンケやパンゲマナンの足跡を重ねてみると、一種の無常観を感じる。本書は「隣人をよく知ろう」プログラムによる助成を受けて出版された。

なお、押川典昭氏は本書を含む四部作の翻訳で、2007年度第59回読売文学賞(研究・翻訳賞)を受賞した。(川崎)



木村李花子著『野生馬を追う ウマのフィールド・サイエンス』

東京大学出版会、2007年8月刊、A5判、
上製(ハードカバー)、194ページ、
2,800円(税抜き)

馬に魅せられ続けてきた著者による抒情詩的なフィールドノート。著者の木村李花子氏は、東京農業大学を卒業後、馬の博物館

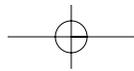
に勤務する傍ら名古屋大学大学院で農学を修め、現在はインドに在住し、馬事文化研究所を主宰している。本書の舞台は、北海道、カナダ、ケニア、そしてインドだ。著者の関心は、自らの専門である馬の生態のみに留まらない。本書の醍醐味は何より、そこに暮らす人々との関わりや研究者自身の感情までもが、多数の魅力的な写真とともに縦横無尽に活写されている点であろう。その意味で、英題に冠された MANDALA OF EQUUS (馬のマンダラ)とは、言いえて妙である。

専門的な事柄も非常に丁寧に説明されており、門外漢でも抵抗なく読み進めていける。広く一読を勧めたい。

最後に、財団側の担当者として本書の制作にわずかながらも携わらせていただいた身として、東京大学出版会編集者・光明義文氏の、良い本を作りたいという熱い思いに心打たれたということを申し添えておく。

なお、本書は2007年度JRA賞馬事文化賞を受賞した。(楠田)





短信

地域社会プログラムニュースレター[Join人]ジョイント)創刊号が発行されました。

2007年10月25日、地域社会プログラムニュースレター[Join人]ジョイント)創刊号が発行されました。全国各地で「地域づくり」を実践している人達を紹介し、応援することを目的に作った冊子です。誌名の[Join人]には、多くの人に参加(Join)していただき、交流のつなぎ目(Joint)の役割を果たしたいという気持ちをこめました。創刊号では、特集として3つの違った「まち」での活動をとりあげました。特集以外では、昨年度から助成を開始した「ユース」「離島」助成対象の方による活動紹介「ただいま奮闘中」、プ

ログラムオフィサーによる訪問記「おじゃまします! PO訪問記」、「地域ニュース」などのコラムがあります。いずれも読んでいて元気の出る紙面をこころがけました。第2号の特集は「記録すること、伝えること(仮題)」で、3月下旬に刊行予定です。ニュースレター[Join人]の購読をご希望の方は、トヨタ財団地域社会プログラム係までご連絡ください。
e-mail: gp4ca@toyotafound.or.jp
tel: 03-3344-1701。



財団ウェブサイトが新しくなりました

10月15日に財団ウェブサイトをリニューアルしました。<<http://www.toyotafound.or.jp>>以前はあまり更新してこなかったウェブサイトでしたが、財団の活動を広く知っていただ

くことを目的として、トピックスのコーナーを設け、公募中のプログラムに関する情報だけでなく、財団の活動や助成プロジェクトについて、随時更新しております。また、この更新情報に関

するお知らせを中心としたメールマガジンも開始しました。将来的には助成を受けたプロジェクトの成果の発信、交流の場にしたいと思っております。

編集後記

10月から広報に異動して以来、懸案だったトヨタ財団レポート105号をやっと発行することができ、ホッとしました。発行が遅くなり、結局のところ2月になってしまいましたが、そのおかげで、新刊紹介で『野生馬を追う 馬のフィ

ールド・サイエンス』のJRA賞馬事文化賞の受賞、『ガラスの家』を含む「ブル島四部作」の読売文学賞の受賞を伝えることができました。
2008年度のトヨタ財団は社会への発信を重視します。ウェブサイトだけでなく、トヨタ財団

レポートも次号からリニューアルし、定期的に発行する予定です。ご意見、ご感想等お待ちしております。(E.K)

トヨタ財団レポート No.105

発行日 2008年2月29日
発行所 財団法人 トヨタ財団
発行人 加藤広樹
編集人 佐々木敬介
DTP 中垣デザイン事務所
印刷 真友工芸株式会社

